

2、鳥浜貝塚 概要 縄文の時代観を書き替えた「縄文のタイムカプセル」 福井県若狭町三方



鳥浜貝塚は三方五湖のなかの三方湖の南東の方向の三方町鳥浜にあり、ほぼ南北に流れる蓮川とその支流高瀬川の合流地点一帯の西側からのびる丘陵の先端部に位置し、その規模は東西約100メートル、南北約60メートルの半月状と想定されている。

当時は、椎山丘陵が西方から東方へ岬のように延びていて、三方湖はその丘陵の先端付近まで湾入していた。

その丘陵南側斜面で三軒分の竪穴住居跡も発見され、湖畔に鳥浜人が居住し、今の若狭地方の拠点集落であったのではないかと考えられている。

遺物の含まれる層は現在の地表面より約3m下から7m下までおよんでおり、当時は湖中であつたが、現在までに約3メートルの土が堆積し、保存状態の良い「縄文のタイムカプセル」と呼ばれる貝塚である。

当時の丸木舟、木製品や縄、編物、漆製品、木の実・魚・貝類なども含め、自然遺物といった有機物が良好に保存されており、発掘調査によって縄文の人々の生活を明らかにする生々しい資料が姿をあらわしました。



丸木舟を出土した遺跡として、鳥浜貝塚(若狭町鳥浜)・コリ遺跡(若狭町鳥浜) 住居跡の検出された遺跡として、北寺遺跡(若狭町向笠) 阿蘇稲荷遺跡(小浜市阿蘇)、若狭遺跡(おおい町三重)などが知られています。

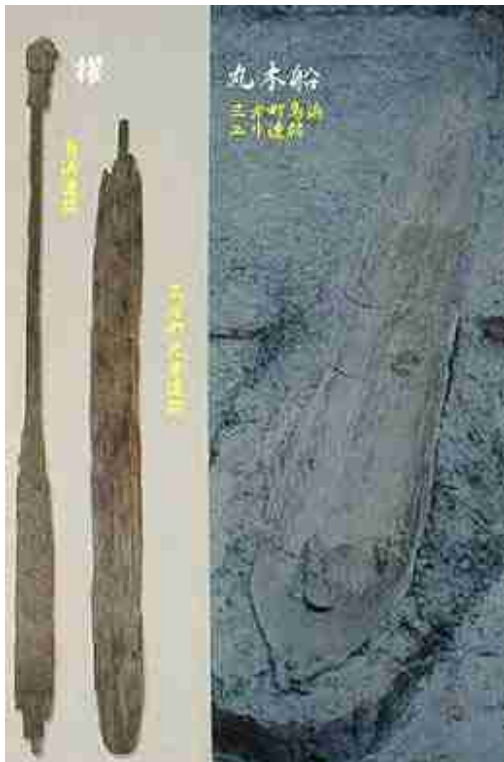
2.1、縄文時代像を塗り替えた 鳥浜貝塚出土遺物

若狭歴史民俗資料館 HP 資料より整理

遺跡は、海拔 0m～-4.0m にある低湿地帯貝塚で、赤漆塗の櫛をはじめとする漆製品、石斧の柄、しゃもじ、スコップ状木製品、編物、縄などの有機物遺物やヒヒョウタン・ウリ・アサ・ゴボウ等の植物遺体、丸木舟、糞石など、通常は腐食して残りにくい貴重な遺物が、水漬けの状態で良好に保存されていたため、「縄文のタイムカプセル」とよばれる由縁である。

約 5,500 年前の約 60cm の厚さの遺物層の中には、ドングリ・クルミなどの種子層、魚の骨やウロコなどの魚骨層、淡水の貝殻の貝層が確認された。これらの堆積状況から、秋に採取した森の食物を秋から冬にかけて食べ、春には三方湖で魚や貝をとっていたことが分かった。

また、夏は若狭湾に回遊するマグロ・カツオ・ブリ・サワラを捕って食べていたことがわかり、季節に応じた食生活の様相が明らかとなった。



鳥浜貝塚出土の「漆」



「ひょうたんの果皮」



「クルミの残滓」



「糞石」

縄文時代像の変化の始まりとなったのは、縄文前期(約 6500~5000 年前)を主とした三方町の鳥浜貝塚の、1962 年から 86 年の発掘調査でした。この三方湖畔の優良な低湿地遺跡は、残りにくい有機質の遺物を多数出土し、当時の生活のようすが復元できる「縄文人のタイムカプセル」とよばれました。狩猟と採集や原始的な漁にたより、長期の定住はできず文化程度も低いといったそれまでの縄文時代像を、根底から見直していく大きな転換点になりました。

鳥浜貝塚の遺物のなかには、ゴボウ・アサ・アブラナ・リョクトウ・シソ・コウゾ・漆作りに関連するエゴマなどの種子や、ヒョウタンの種子と果皮があり、これらは野生種ではなく栽培種とみられていますから、縄文前期にはすでに食用のものをふくむ栽培植物があったことがわかりました。

日本を原産としないこれらの植物は、大陸からもたらされたのだろう。

丸木舟・櫂・弓・石斧の柄・鉢・櫛など、木製の道具の種類や量の豊富さや高度な製作技術は現代からみても驚くべきものです。

さらに、木製品や土器に塗られた赤や黒の漆の技術は、すでに同時期の中国のものよりすぐれています。

日本の代表的伝統文化の漆工芸は、その源流は大陸から伝わったのかもしれませんが、少なくとも縄文前期から独自に高度な発展をしてきたものと考えてよいでしょう。

ほかに、大麻の糸、アカソのアンギン(編布)、ヒノキの細割り材を使った漁網・かごなどがある。

湖、海での網を使った漁、かごを使っての山菜や木の実の採集、それに狩猟の生活のなかで、栽培植物も利用して道具や衣類を作り、食用にあて、漆工芸品を作りました。衣服を着て漆塗りの櫛を髪にさし、真珠や骨角や石のアクセサリーで鮮やかに身を飾っていた。

狩猟の時や木製の道具・アクセサリーを作る時に使う石器の石材のなかには、遠隔地でしか産出しないものもあり、土器は他の地方の影響をうけていますから、ほかの集団との広い交易も行っていたことがわかる。

厳しい自然のなかで定住生活をいとなみ、そのうえこれらの高度な文化をもっていたとは驚きです。鳥浜貝塚に続く新保チカモリ遺跡や、三内丸山遺跡などのより高度な縄文文化への発展の土台は、すでに鳥浜貝塚が代表する縄文前期にはできていたといえる。



鳥浜貝塚遠景

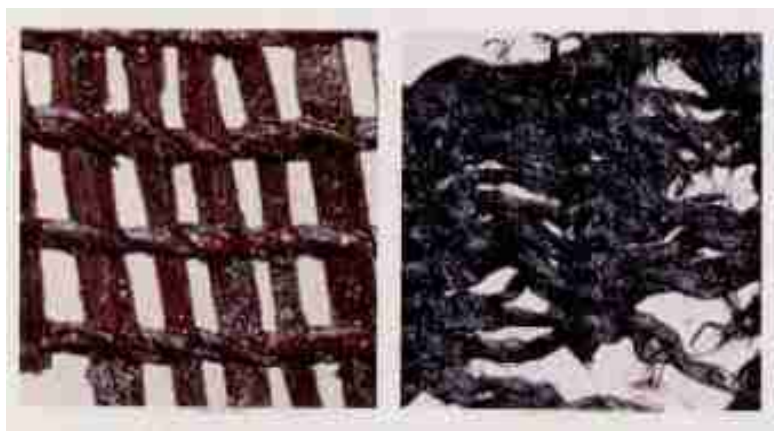
写真中央の河口と丘陵が接する付近が鳥浜貝塚。湖は三方湖



めずらしい土器

ベンガラを塗った丹彩土器(左)は、鳥浜貝塚と同時期に京都市の遺跡から出土した土器とよく似ている。高さ 10.5cm

斜格子文土器(右)は縄文草創期のものでたいへんめずらしい。高さ 12.7cm



いろいろな編み物
もじり編み

アングイン(編布)



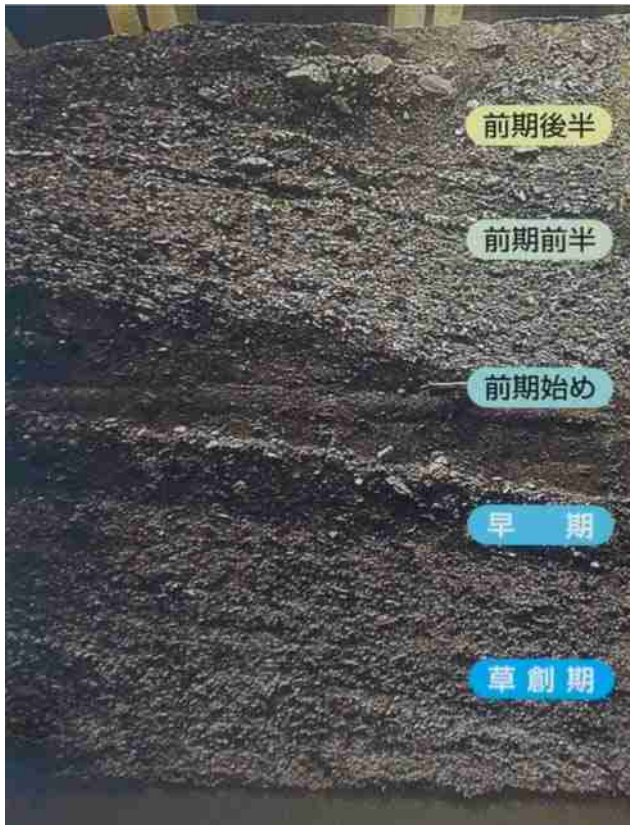
ヒョウタンの種子と果皮



石斧の柄長さ 68cm
木の幹と枝の股を利用している。
石器の刃をはめ込めるように
ソケット状に加工しているのがわかる。

2.2. 日本 最古の栽培植物「ひょうたん」の殻と種

一万年前、日本海で発生した巨大噴火の痕跡の下からひょうたんの殻が出土



鳥浜貝塚の縄文早期の地層から出土した一万年前のヒョウタン＝ユウガオの殻、その年代の決め手になったのが、ヒョウタンの殻の埋まっていた層の直上にある、火山灰です。

写真の中央からやや下の白い土の層が、その火山灰です。このすぐ下からユウガオ・ひょうたんの殻が見つかりました。

この灰は、いったい、どの火山から飛来したのだろうか。この鳥浜貝塚に残る火山灰層は、厚さが3cm前後もあり、かなり大きな噴火を物語っています。

日本海の北西部の海底には、鳥浜貝塚と同じ成分構成を持つ火山灰が、海底地質の調査で、見つかっています。

その火山灰の層は、韓国東岸沖180kmにあるウルルン島周辺で最も厚く堆積している事から、鳥浜貝塚の火山灰は、ウルルン島から飛来したと考えられています。

ウルルン島から福井県の鳥浜貝塚までは、約500kmも離れていながら、火山灰が3cmも積もっていますから、巨大な噴火と申せましょう。

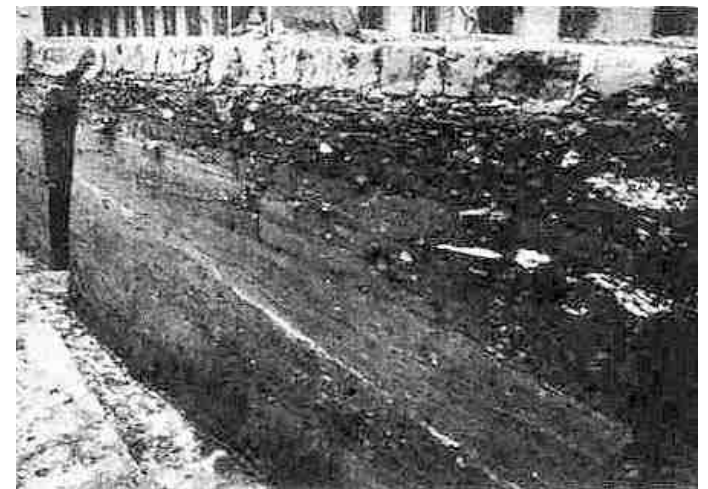
火山学者はこの一万年前の噴火の規模を噴火マグニチュードM6.7としています。



鳥浜貝塚出土ひょうたんの殻

ひょうたんの原産地は西アフリカのニジェール川流域。どんな経路をたどって日本まで来たのか、出土した丸木舟で運んできたのだろうか・・・

また、この鳥浜貝塚で「ひょうたん」の殻や種子が出たことから、この地で「ひょうたん」の栽培がはじまっていたとも考えられている。



■ <http://blog.goo.ne.jp/rgriggs1915/e/f0733f9069405a6bc43d8637c738b252>より整理

貝塚断面の剥ぎ取りカラー写真は若狭三方縄文館常設展示図録より整理

『鳥浜貝塚 3』

1981年度・1982年度調査・研究成果。
編集 鳥浜貝塚研究グループ。1983年